

# 性格に与える遺伝的要因と環境的要因に関する考察 —心的現実の再発見—

浮田 徹 嗣

## 目次

1. はじめに
2. 性格と遺伝的要因・環境的要因との関連
3. バーナム効果再考
4. 質問紙法性格検査の妥当性
5. 質問紙以外の手法
6. 性格と対人関係
7. 空想と心的現実
8. 性格とは個人に内在する属性か
9. おわりに

## 1. はじめに

最近、経済誌で遺伝子検査による性格解析サービスに関する記事を見かける<sup>1)</sup>。昨年、日本では、このサービスに乗り出す企業が相次ぎ、価格も低くなったようだ。数年前には「性格はDNAが決めるの嘘」といった記事が科学誌に掲載されたが<sup>2)</sup>、それでも性格をDNAが決めているという考え方を支持する精神科医や心理学者は少なくない。

ところで、性格が血液型によって決まるかのような主張をする者がいるが、そういった主張を科学が否定しきることができないままである<sup>3)</sup>。背景には、性格を客観的に測定する方法が確立されていないこともあるだろ

う。身長が高くなるかどうかが血液型によって決まるといった主張ならば、データを集めて統計学的に処理すれば検証することができる。

それができないのは、そもそも性格というのは個人に内在する属性であるというより、対人関係にまつわる空想の中に映し出される幻影のようなものであり、心的現実の中の間関係抜きには語り得ないものだからではないだろうか。

本稿では、性格と遺伝・環境の要因についての見解を再検討し、性格検査の意味、性格の鑑定などについての知見を整理し直すことにより、性格という概念や性格類型という概念を再考することとしたい。

## 2. 性格と遺伝的要因・環境的要因との関連

「氏か育ちか」という言い回しが示すように、性格形成に遺伝的要因と環境的要因がそれぞれどの程度の影響を与えているのかについては、古くから様々な研究が行われてきた。特に有名なのはミネソタ双生児研究として知られている調査で<sup>4)</sup>、生後すぐに別々の家庭に引き取られ、別々の環境で育てられた一卵性双生児について似ている度合いを調べ、同じ家庭で一緒に育てられた一卵性双生児の似ている度合いや二卵性双生児の似ている度合いと比較した研究であろう。このプロジェクトでは、環境的要因よりも圧倒的に遺伝的要因の方が性格に大きな影響を与えている。なお、以前、筆者は既に双生児研究の問題点について指摘したことがある<sup>5)</sup>。筆者の調査では、一卵性双生児間の出生時の体重の相関係数は0.952で、二卵性双生児間（同性）の出生時の体重の相関係数は0.612であった。また、二卵性双生児では体の大きい方を第一子とする傾向が顕著で—先に出生してきた方を第二子とするという法律が改正され、先に出生した方を第一子とすることになってからも同じ傾向が見られた—、第一子と第二子に対する親の接し方もかなり違っていた。一方、一卵性双生児においては、第一子も第二子も親はほとんど変わらない態度で接して育てていた。つまり、一卵性双生児は出生後両親からほぼ同様に扱われるのに対し、二卵性

双生児は出生直後からお兄ちゃん的（お姉ちゃん的）扱いを受けるということ considering しなければ、一卵性か二卵性かの卵生の比較により遺伝の影響を議論するのは適切ではないということを明らかにした。成長後の性格傾向の相関係数の違いは、出生時の体格の違いに由来する、生後直後すぐからの親の接し方の違いによる面もあり、相関係数の違いの解釈にはこの点も考慮する必要があるということを指摘した。

また、性格の大きな偏りのために精神疾患と診断される患者を対象に遺伝的要因の関与について研究し、それらの疾患が脳内神経伝達物質（ドーパミン、セロトニン、ノルアドレナリン、オキシトシンなど）に関連していること、脳内神経伝達物質の多寡はDNAの情報により遺伝的に決定されていることをクロニンジャーが突き止め<sup>6)</sup>、その後、一般の人にもそれが当てはまることも示した（新奇性、損害回避、報酬依存、持続性—好奇心に基づいて新しいことに挑戦する、危険を避けようとする、社会に適合しようとする、取り組んだことを熱心に続けようとする—の4因子は遺伝の関与が極めて強く、その4因子に基づいて周囲の人との関係で形成される自己志向性・協調性・自己超越性の3因子と併せて、性格を説明する7因子とした<sup>7)</sup>。

それらの指摘にもかかわらず、人間の心をタブララサ（白い紙）だとする経験主義の思想も心理学の世界には根強く残っている。経験主義の流れをくむ行動主義学習理論の立場のミシェルは、人間の行動は性格特性によって説明されるものではなく、そのような行動をとらざるを得ない状況をどれくらい経験するかで説明されるべきものであると主張し、人間の行動と状況との関連を詳細なデータで検証した<sup>8) 9)</sup>。

結局、遺伝によって強く規定されるような特性もあるが、環境の影響も受けやすいものもあり、それらが輻輳しているという考え方が、現在のところは主流であるといえるだろう。つまり、よく分からないということなのである。

### 3. バーナム効果再考

性格についての言説がよく分からないものになるということについては、バーナム効果に関する研究をたどっておくことが便宜であろう。バーナム効果とは、社会心理学小辞典によると「誰にでも少しずつ当てはまるような、一般的なパーソナリティの記述を与えると、人々は、記述全体を自分に合っているものとして受け入れやすい傾向」と述べられている。パーソナリティ解釈が当たっていると感じられるのはこの効果のためであるとす<sup>10)</sup>。

この効果についての研究としては、パウワーが、筆跡鑑定で性格を診断できるといって135人の筆跡を集め、被験者に筆跡鑑定結果として、全員に同じ文章の判定書を送って、どれくらい当たっているか答えてもらったところ、95%が「当たっている」と答えたという実験が有名である<sup>11)</sup>。

これと似た事柄であるが、ハーフェナーという興行師は、観衆の任意の人の性格を手相で当てて、ショーを盛り上げるというテクニックで有名になったが、その裏側に関して手記に書いている。性格を当てるといっても、相手がどんな人であっても「あなたは他人から好かれたい、賞賛されたいと思っていますが、それでも自分自身に批判的な傾向があります。あなたは短所もありますが、バランスをとることを学んできました。あなたはまだ活用していない、活かし切れていない能力がかなりあります。(以下略)」といった判定をするといったものである<sup>12)</sup>。そういったことを言えば必ず「当たっている」という反応が返ってきてショーの雰囲気をもりあげることができたのだとしている。

ただし、もし、「あなたは意地悪で、協調性がなく、ケチで…」といった判定なら相手も「当たっていない」というかもしれないので、誰にでも当てはまるようなことを肯定的なニュアンスで伝えれば、「当たっている」と思うという反応になったのであろう。

#### 4. 質問紙法性格検査の妥当性

それならば、心理学の領域で、一応、妥当であろうと評価されている性格診断検査（YG性格検査など）についてはどうなのであろう。

例えば、同一人物が違う日に2回質問紙法性格検査を受けると様々な尺度の尺度内相関係数が0.9をこえることはまずありえないとされている<sup>13)</sup>。このことが、一卵性双生児間の相関係数（0.7程度）を、性格が遺伝的要因によって規定されていることを裏付ける根拠とされることが多い。しかし、うがちすぎて皮肉な見方をすれば、ある意味では質問紙法性格検査がそれほど信頼できるものではないことを示しているデータであるともいえると筆者は考えている。

また、YG検査が科学的な検証に堪えないことを様々なデータから村上是指摘し批判しているが<sup>14)</sup>、筆者としては村上に全面的に賛同するわけではないとはいえ、非常に興味深いデータであり、重要な指摘だと考えている。

はじめに述べたように、遺伝によって性格は決定されているという主張は根強い<sup>15)</sup>。その性格をDNA検査で調べることが比較的安価にできるようになってきているとはいえ、それでも数万円かかるため、そのDNAを調べる（推測する）ための、質問紙法性格検査も作られている<sup>16)</sup>。この質問紙法性格検査は、「性格を決めるのは脳内神経伝達物質であり、DNAを調べれば科学的に診断できる」とした上で、DNA検査を受けなくても簡便に神経伝達物質の働き方を推測するために開発されたものである。

この質問紙では、「イヤな仕事でも断りきれず引き受けてしまう」「自分の好きな曲を聴くのが好き」「嫌いな科目が平均点を下げてしまう」「絶対にイヤという人はそんなにいないし、好きな人もそう多くはない」「感じのいい人は、自分の好みの場所や店に気楽に連れて行きたい」「健康は大事だともう」「目立たない仕事をする人も組織には必要だと思う」「生まれつき才能がある人がうらやましい」「苦手科目はやらないので点数があまりよくない」「気に入らない相手からはそれとなく離れるようにしている」

「田舎が好きだ」「組織の一員という自覚が強い」「スポーツもそこそこやる」「勉強するのは嫌いでない」「絶対にイヤという人はそんなにいない」「好きな相手の助けになりたいと思っている」「過去の経験は大切だと思っている」「仕事を人に頼むのが苦手だ」「見たこともない問題に遭遇すると頭が真っ白になる」「発散できずにストレスがたまってしまうことがある」「好きな相手でも、よく見極めてからでないとつきあえない」「レストランのメニューを見ると迷ってしまう」かどうかといった質問を数百項目並べて、答えさせ、その採点結果から新規性追求タイプか否か、損害回避タイプか否かを判定し、4タイプに分けようとするものである。

このような項目であれば、自分に当てはまるかどうか答えるのにかなり迷うことであろう。4タイプのどれに当てはまるのかをみるわけだから、バーナム効果は現れにくい、遺伝子でわかることを簡易に質問紙で行うことができるというこの検査がどの程度妥当なものであるかを実証的に検討した研究は学術雑誌には公表されていない。

そもそも自己評定式の性格検査でどれくらい、人々は適切に自分の性格特性を評定しているのだろうか。

岸田は、セルフイメージは当人の客観的性質の反映ではないと主張する<sup>17)</sup>。主観と客観の逆比例の法則があるというのである。つまり、自分の性格についてのコメントは他者からの評価と反対になりやすいというのだ。ひとに親切にするのが当然と思っている人はたまたま自分が十分には親切に振る舞えなかった時のことばかり記憶していて、自分は親切さが足りない人間だと思ってしまうことがよくある。吝嗇な人は気前よくお金を払ってやるとそのことをよくおぼえていて、自分は気前がいい人間だと思いがやすい。なお、岸田によると、他人についてのコメントはその人の人となりや雄弁に示すとされている<sup>18)</sup>。他人に親切にすることの多い人は他人からも親切にされることが多くなり、結果的にその人は、まわりの人のことを「あの人は親切だ」ということも多くなる。意地悪な人は他人からも冷たくされることが多くなり、結果的にその人はまわりの人のことを「あ

の人は冷たい」ということが多くなる。他人に暖かく接することの多い人は他人からも暖かく接してもらうことが多くなり、結果的にその人は、まわりの人のことを「あの人は暖かい」ということも多くなる。意地悪な人は他人からも意地悪くされることが多くなり、結果的にその人はまわりの人のことを「あの人は意地悪だ」ということが多くなる、というのである。他者からの評定は難しいようだ。

## 5. 質問紙以外の手法

筆者は、大学で臨床心理学関連の講義を担当しているせいか、様々な裁判で性格判定を行いコメントする機会が多い。ただ、裁判のやり方によってコメントを述べると、どうも自分の意図とは違うようにそのコメントが利用されてしまうというような気持ちと、そういったコメントを述べてしまった自分自身に対する内心忸怩たる思いを感じるが多い。

人間というものは、相手に応じていろいろと態度を変えることができるものである。筆者自身は、人間の性格は、相手との関係でいくらかでも変わりうるものだと考えている。教師の前ではまじめな学生が、友人の前ではひょうきんに振る舞っていたり、友人の前ではおとなしい少年が、母親の前では手のつけられない凶暴な態度をとっていたり、といった例は枚挙にいとまがない。こういったことを、心理アセスメントの際に臨床家自身が念頭においておくことは、大切なことであると考えている。相手の性格が冷淡なのか、自分が判定したら冷淡だという結果になってしまっただけなのか、そういったことを反省しながら相手に関わる必要があるのではないかと考える。

唐突かも知れないが、ここで、水の温度の測定を考えてみたい。温度計によって水温は測定できるが、温度計の示す値は、温度計を入れた後の水温であり、温度計をいれる前の水温ではない。小さな容器に入れた水の温度を測る時、その測定値は、水に入れる前の温度計の温度によって変化する。具体的にいうと、暖めた温度計を用いる場合の方が冷やした温度計を



用いる場合よりも高い値を示すことが予想される。同様に、被検査者の態度も、検査のあり方に大きな影響を受ける。検査者が冷淡な態度で性格評定に臨むなら、被検査者も冷たい態度をとることが予想できる。もちろん、被検査者がどのような人であろうと同じ態度で接することが、判定を行う検査者には求められているが、それが完全になされているかどうかは疑問である。

先に述べたようにクロニンジャーは、一度取り組んだことに熱心に取り組み続けるかどうかは、遺伝子によって決定されているという説を唱え、この考え方は比較的多くの心理学者に受け入れられているようである。ただ、この「熱心に取り組む」というのは誰が評価するのであろうか。

学業に熱心に取り組むとか、スポーツの練習に熱心に取り組むといった例ではわかりやすいが、周りの人から見て好ましくないと思われることに執着し熱心に取り組んでいる場合も、熱心に取り組むと評価して良いのだろうか。また、やりたくないことを勧められて持続的に熱心に取り組めない人をどう評定したら良いのだろうか。

岸田は次のような趣旨のことを述べている。「あきっぱい子やねばり強い子が現実に存在しているという前提が成り立つためには、ねばり強い子と判断される子と、子どもをそう判断する誰かがいなくてはならない。問題は、判断される子どもの側というよりはむしろ判断するものの側にある。性格判断は、判断する側の何らかの価値観が伴うものであり、そこに、判断されるものに対する希望、期待、要求などの欲望が表れるものである。」<sup>19)</sup>

評定者が「熱心に取り組まない」という表現を用いる時には、一方的な価値判断の押しつけにすぎないかもしれないという反省も必要である。(なお熱心に取り組むことが評価されないようなことに熱心であれば、ある意味で精神疾患の範疇に入るかもしれない。このことは後述する。)

性格判定ではないかもしれないが、理解力があるかどうかも心理判定に持ち込まれることも少なくない。筆者の担当した事例では、医療上のイン



フォームド・コンセントを本人の意思に任せて良いのかについて、様々な評定を行ったというケースがある。

医学的な治療を受ける際にインフォームド・コンセントというのが重要だとされているが、なかなか自己決定できない人に対しては、現時点での医学では最善と思われる方法を提示して、それに同意してもらうことになる。自己決定権を侵害したとされないように、本人がなかなか自己決定できないということを、判定結果として残しておく必要が生じる場合もあるので、本人が自己決定できる特性を持っているのかどうかを、心理学的に確認しておくことも行われている。

筆者自身の経験からいうと、「本人が現状をどう理解しているか、本人はどうなりたいたのか等々」を面接で聞き出して、意思決定能力の心理判定としていたが、どうも、患者本人に内在する能力を判定しているのではなく、「患者の意思表示を、患者の真の主体的判断とみなしてよいか」を判定しているにすぎないかと感じることがあった。患者は自分が思っていることを勝手にしゃべるし、意思決定能力の判定者としては、診療に関わる希望を適切に表現できるかを判断しなければならない。しかし、そういった判断の材料になるようなことを適切に話してくれる患者ばかりではないのである。

適切な話と筆者が考えるような話をしてくれなかったケースでは、主体的判断力に問題があるといった判定をしなければならないが、仮に「真の主体的判断でない」と判定されても、それは患者の無能力を意味するのではなく、「患者の意思表示が真の主体的判断とみなすことができない状況が起きた」ことを意味するにすぎない。そして、患者の主体的判断が明らかでない状況では本当は自己決定権そのものが無効となるのである。この場合に無効となるのは自己決定権という概念であって患者の主体ではないことを重要な点として指摘しておきたい。

実際の医療の場では、周囲に勧められて仕方なく治療を受けるということにたくて治療を拒んでみせる患者もいる。また、自ら治療を選択でき

ないほど絶望していて誰か全面的に頼れる人が欲しいという気持ちから、治療を拒む患者もいる。このように、治療を拒む言葉が多様に解釈され、これを真意とみなしてよいと判断できない事態では、推定的同意が適用され治療が導入されうる。また「恐がって治療を拒む患者」への治療が正当とされるのは、治療を拒む言葉が患者の真意だと判断しかねることが根拠となる。

このような例をもとに考えると「患者の性格特性のために、本人の同意を得ずに治療を導入する」という表現は不適切だということになる。「患者の意思が同定できない状況が起きているから本人の同意を得ずに治療を導入する」という表現が適切である。

さらにいうと、患者の言葉を聞いてその真意を理解することができなかったのは、つまり、むしろ理解力がないのは、心理判定者である私であったという気持ちが強い。「私に患者の話したことを十分に理解する能力がなかったから患者の同意を得ずに治療した」とまでいう気持ちもあるし、少なくとも患者に「無能力」というレッテルを貼ることは絶対にすべきでないと感じてきた。

## 6. 性格と対人関係

質問紙法性格検査の妥当性・信頼性について研究した和田が分析に用いた言葉を見てみよう<sup>20)</sup>。この分析では性格特性を表すきわめて多くの言語を対象としているが、具体的には次のような用語である。すなわち「親切的な」「ルーズな」「話し好き」「独創的な」「傷つきやすい」「緊張しがちな」「いい加減な」「攻撃的な」「進歩的な」「無口な」「やさしい」「怒りっぽい」といった言葉である。

親切とか冷淡とかそういった「性格」は、相手がいなくて現れようがない。いわゆる性格を表すといわれる言葉は対人関係のあり方に関係してもちいられるものが多い。そのことを考えると、「性格」とは対人関係の中に映し出された幻影に過ぎないのかもしれない。

性格という言葉のを和英辞典で調べると、characterとpersonalityという英語が出てくる。この二つの語の違いについて、心理学書には、通常は以下のように説明してある。パーソナリティというのはペルソナ（仮面）を語源とする言葉で、場面に応じて変わりうるという含意のある用語であり、それに対しキャラクターというのは、クルトール（彫り込まれたもの）を語源とする言葉で、一生を通じてほとんど変わらないという含意があるとされている。こういった説明が不適切とはいわないが、キャラクターの語源は、それがコンテキストによって様々に変わりうるものであると示しているのではないだろうか。そもそも、彫り込まれたものというのは、ヒエログリフ（聖刻文字）のような文字を意味するものであった。また、象形文字・表意文字も、文字は一字では意味を判断することができず、他の文字との関係で初めて意味を判断することができるものである。表意文字である漢字の場合でも、一文字では（他の文字との関係や文脈抜きには）多義的に理解され、意味を判断することはできないのである。（文字の「文」も、文脈によってはお金を表すものとなり、「字」も文脈によっては地名を表す接頭辞となる。他の文字—Character—との関係で、どのような面が表れてくるのかが変わってくるのである。これと同様に、人間の性格も、どのような人とともにいるかで当然変わってくると考えても良いだろう。）

また、ある人がどういう人であるかを判断するには、他の人との関係の中でその人を理解しなければならない。そして、別の人との関係においては、その人はまた違った性格の人として判断されうるのである。つまり、性格というのはその人の中に内在する特性ではなくて、その人の人間関係に映し出される幻影にすぎない。パーソナリティと呼ぼうとキャラクターと呼ぼうと、性格とは、その人と他者との間で起きる事象全体が帯びる特性である。相手が誰もいない状況で内向的だったり、親切だったり、冷淡だったりする人がいるだろうか。対人関係を抜きに、性格を判断することはできまい。

## 7. 空想と心的現実

ここまで性格というものを対人関係の中で表れてくるものという考え方を示してきた。そうすると無人島に1人でいて楽観的な人がいるとしたらそれは、対人関係の中で考えて良いのだろうか。

我々は1人でいるときには対人関係のない状態にいると考えて良いだろうか。実際には、1人でいる時にも、心の中にいる誰かを思い出しながら、その人との関係で、様々な気持ちになり、様々な行動をとる。目の前に他者がいなくても、心の中にいる母親や父親のイメージが空想的に蘇ってきて「おまえなら大丈夫だ」と呼びかけて見守っていてくれるように思える人は、親のために諦めず頑張ろう、諦めなければ何とかなる、という気持ちで楽観的にもなれるのではないだろうか。

遺伝子は変えられない、過去の経験は変えられない、となると、性格はそう簡単には変えることができないと考えて良いのだろうか。川幡は「性格は変えられる」と主張する<sup>21)</sup>。性格に関するいろいろな先行研究を踏まえた上で、(親にとって)困った(子どもの)性格を、親をロール・プレイングに参加させることで、劇的に変化されることができたことを実践例により報告している。

遺伝子は変えることができなくても、過去の経験は変えることができなくても、現在の対人関係に関する認識の仕方(実際の間人関係のあり方を含めて)を変えることができれば、性格や行動の仕方は変わるのである。

筆者自身も、同じような経験をしてきた。以前、他のところでも報告したことがあるが<sup>22)</sup>、強迫神経症的な傾向を持つ患者に対して、ロール・プレイングを応用した対応を行って、症状の軽快を体験したことがある。

この患者は20代の女性で(プライバシー保護のため差し障りのない範囲で改変を加えている)、自分でも困ってしまうほど、身の回りを清潔に保つことに熱心であった。一応、就職して働いており、社会生活を送ることができないほどではなかったが、洗濯や、食器洗いなどの際に、徹底的にきれいにしなければ気が済まず、洗い終わったものが清潔ではないかもし

れないものに少しでも触れると根気強く洗い直すということであった。

また、男女の関係についても清潔でなければならないと考えていて、潔癖な態度でいることにすこぶる熱心であった。この点について、本人は、「高校かそれより前から、私がおしゃれをすると、母の機嫌が悪くなるというような気がしていて、大学の時は、口紅や化粧をすると母に咎められた。きちんと身支度しなければいけないけれど、身支度を過度にするといけないと感じて生きてきた。私が女性としてのきちんとした身支度を整えることを母は嫌っていると感じてきた。男女交際に関してうるさかったし」と語っていた。また、「小学生の時にテレビを見ていたら、少女が着替えるシーンが出てきて、たまたま一緒に見ていた母親から、こんな良くないテレビは見てはいけないと強く叱責された」とも話す。

何度か心理療法的面接を重ねるうちに、彼女は、実際に母親が彼女に潔癖であるようにしつけてきたのか、自分でそういう母親のイメージを作り上げて、そのイメージに合わせるように自分自身の行動を規制してきたのか、どちらなのかよくわからないと語るようになっていった。実際に筆者も母親と話をする機会があったが、娘に潔癖であることを異常なほどに強く求めるような人だという印象は受けなかった。

このケースにおいては、娘の方が「自分が母親について勝手にイメージを作り上げてきたのかもしれない」と述べるようになってから、強迫的な症状も改善し、面接を終結にした。

クロニンジャーの研究そのものは、元々は、強迫神経症といった精神疾患にどのような遺伝子が関わっているかということから始まったわけだが、それが、一般に人間の性格特性も遺伝子で診断できるという結論に達したということであった。先に述べたように、熱意を持って頑張るというのは、本人がそのことに満足し、まわりの者がそのことを評価していれば良いが、本人自身もまわりの者も、本人のこだわりにマイナスの評価をしていけば、まさに強迫神経症的であるといえる。

## 8. 性格とは個人に内在する属性か

ここまで性格が遺伝子（DNA）に規定されているという考え方を取り上げて、批判的に考察してきた。

それでは、生物学の立場から遺伝子を研究している学者は、遺伝子についてどのように考えているのだろうか。例えば、池田清彦は「多くの遺伝子は形質形成に関して独立には働かずゲノムシステムの中で共同的に働いているに違いない」とする<sup>23)</sup>。ゲノムシステムというのは、遺伝情報を解釈するシステムであり、構造主義言語学のような立場で情報をとらえるべきであるということである。情報は、先に述べたように、伝えるものとそれを受け取るものとの関係で理解するべきものである。

例えば、池田は、DNAをレシピのようなものだという考え方に少しばかりだけは賛同するが、もし同じレシピであれば同じ料理ができるのかと疑問を投げかける。（遺伝子、DNA、ゲノムはそれぞれ微妙に意味が違う用語であるが、ここでは詳細には説明しないことにする）

料理人の腕、調理器具、レシピに書かれたとおりの材料を用意できたとしてもその食材の質、厨房の環境などなど、様々な違いが起きてくるのが想定されるので、同じレシピから同じ味の料理はできないだろう。それと同じように、もしDNAが人間の性格をかなり規定しているとしても、「人の性格はDNAで決まっている」とまではいえないであろう。

DNAの寄与ということを考える上で、ソメイヨシノの取り上げを試みよう。ソメイヨシノは、品種改良の過程で偶然つくられたもので、その後、何度も同じことを試みたが、たった一本だけしか作られることはなかった。日本中にたくさんあるソメイヨシノはすべてクローン（接ぎ木・挿し木）なのである。すべてのソメイヨシノが同じDNAを持っているのである。同じDNAを持っているので、開花する気温も個体によって大きな差はみられず、桜前線など様々な指標に用いられている。その一方で、同じDNAでありながらも、個体間の差は皆無ではなく、同じ地域、同じような環境条件でも、早めに咲き始めるものもあれば、少し遅れて開花す

るものもある。

植物の中には、同じ果実から取れた種を、大きく環境の違う場所に植えると全く別の種類の植物であるかのような外観に育つものもある。このような現象はなぜ起きるのであろうか。

池田は、DNAは情報であり、情報は発し手と受け手の関係によって解釈が変わると主張する。これは、生物学的な研究から明らかにされたことであるが、人間の性格を考える際には、まわりの人との関係や、その人が抱いている対人関係にまつわる空想を考慮しなければならないだろう。

結局、性格を個人に内在する属性としてとらえることには、かなりの無理があると考えざるを得ない。

## 9. おわりに

一般に、行動を説明する際には、性格が持ち出されることが多いが、単なるトートロジーにすぎないことが少なくない。学業に熱心に取り組まないのを、やる気のない性格だからと述べ、やる気のない性格なのは取り組む姿勢が熱心でないから判ると述べたなら、全く説明にならないだろう。熱心さに欠ける学生がいたら、性格のせいにはせず、教員の側の関わり方を省みる方がよい。その学生がどのように生きていきたいのかを理解しようと努めているか、相手の人生についてどのような願いを持って接しているか、それを相手に押しつけていないか、相手自身が自分の願望を理解できるような聴き方で話を聴いているか、そんなことを教員として検討してみるべきではないだろうか。

## 文献

- 1) 長谷川愛 (2014)、遺伝子検査—体質・性格など解析可能—、週刊東洋経済、2015年1月3日号、p.184
- 2) シャロン・ベグリー (2009)、「性格はDNAが決める」の嘘、ニュー



- ズウィーク、24(2)、p.56
- 3) 宮川剛 (2011) 「こころは遺伝子でどこまで決まるのか」NHK出版新書、p.167-168
  - 4) Bouchard T., et al. (1990), Sources of human psychological differences : The Minnesota study of twins reared apart, *Science*, 250(4978), p.223-228
  - 5) 浮田徹嗣 (1985)、双子研究—身長、体重既往最大体重についての研究—、日本人類遺伝学会第30回大会抄録集、p.150
  - 6) Cloninger C.R. (1987), A systematic method for clinical description and classification of personality variants : A proposal, *Archives of General Psychiatry*, 44(6), p.573-588
  - 7) Cloninger C.R., Svrakic D.M., Przybeck T.R. (1993), A psychological model of temperament and character, *Archives of General Psychiatry*, 50(12), p.975-990
  - 8) Mischel W. (1968), *Personality and assesment*, New York : John Wiley & Sons (ミシエル、W. 詫摩武俊 監訳、1992、パーソナリティの理論—状況主義的アプローチ—、誠信書房、p.37)
  - 9) Mischel W. (1990), Personality dispositions revisited and revised : A view after three decades. In L.A. Pervin (Ed), *Handbook of personality : Theory and research*, New York : Guilford, p.111-134
  - 10) 吉川肇子 (1994)、バーナム効果、古畑和孝編「社会心理学小辞典」有斐閣所収、p.197
  - 11) 加藤義昭、加藤紀子 (1970) 「心理学」法政大学出版局、p.219
  - 12) Havener T. (2009), *Ich weiss, was du denkst*, Hamburg : Rowohlt Verlag GmbH (福原美穂子訳、2011、「心を上手に透視する方法」サンマーク出版、p.209-212)
  - 13) Clark W. R. & Grunsutein M., (2000), *Are we hardwired? : The role of genes in human behavior*, Oxford University Press (鈴木光

- 太郎訳、2003、遺伝子は私たちがどこまで支配しているか、新陽社、p.13)
- 14) 村上宣寛 (2005) 「心理テストはウソでした」日経BP社、p.177
  - 15) 中原秀臣、佐川峻 (2013) 「人の性格はDNAできまっている」講談社 *a* 新書、p.15
  - 16) 中原秀臣、佐川峻 (2013) 「人の性格はDNAできまっている」講談社 *a* 新書、p.75-108
  - 17) 岸田秀 (1982) 「ものぐさ精神分析」中央公論社、p.300
  - 18) 岸田秀 (1992) 「二番煎じ ものぐさ精神分析」中央公論社、p.192
  - 19) 岸田秀 (1999)、あきっぽい子・ねばり強い子、児童心理、1999年3月号、金子書房、p.25-34
  - 20) 和田さゆり (1996)、用語を用いたBig Five尺度の作成、心理学研究、67、p.61-67
  - 21) 川幡政道 (2013) 「過去の再演を越えて」春風社、p.198
  - 22) 浮田徹嗣 (2010) 母親とともに来談した不潔恐怖の強い強迫神経症患者へのロール・プレイングを用いた援助の試み、心理劇15(1)、p.25-35
  - 23) 池田清彦 (2006) 「遺伝子不平等社会」岩波書店、p.185